

『クリスマス・キャロル』における 聖書の役割

阿久根 政 子

The Bible's Role in Charles Dickens's *A Christmas Carol*

AKUNE Masako

Two great authors, Tolstoy and Dostoevsky, were influenced greatly by Dickens and spoke of him as “that great Christian writer”. But like so many Victorian writers, he was not conspicuously devout. He was reticent on the subject of religion, but we can let an earnest letter which he wrote to the Reverend D. Macrae speak for him.

... All my strongest illustrations are drawn from the New Testament: all my social abuses are shown as departures from its spirit: all my good people are humble, charitable, faithful, and forgetting. I cream them in express words as disciples of the Founder of our religion ...

In his work, he puts a religious emphasis on the New Testament rather than on the Old, on Christ rather than on Jehovah.

First of all, this study is to show the base of the his faith through his itineracy of his Christianity, and secondly to examine the relationship his religious beliefs and the Bible through his works, his letters and his will. Finally I view from the Bible's role as allusion in *A Christmas Carol*.

Key words : allusion, the Bible's role, Christianity, religious beliefs, death

キーワード : アリユージュン, 聖書の役割, キリスト教信仰, 宗教的信条, 死

1 はじめに

二人の偉大な作家、トルストイとドストエフスキーはディケンズに大いに影響され、彼を偉大なキリスト教作家とみなしていた。しかし、多くのヴィクトリア時代の作家たちのように、彼は型にはまったキリスト教徒ではなかった。

ディケンズは、作品において教会、聖職者、信徒に対する辛辣な風刺と聖書の言葉を用いた

喜劇的なパロディのために、非難され議論の的となった。彼の作品に対する宗教界からの批判もまた、高教会派、福音主義派、非国教会、カトリック教会を含み、多岐にわたって厳しいものがあつた。これら宗教界からの批判を招いた原因は、やはり教会に対する辛辣な風刺にあつたことは言うまでもない。彼が小説の中で描いているほとんどすべての福音主義派は風刺の産物であり、福音主義派の熱狂的な説教者達を偽

善的な人物として描き、こうした皮肉った描写は彼の福音主義派に対する不信と嫌悪感を如実に表していると言われている。

ディケンズの信仰の遍歴を辿ってみると、はじめ、彼は英国国教会の信徒の家庭に生まれ育ったが、彼の母親は一時的に福音主義の熱情にのめり込んでいた。しかし、ディケンズ家の人々はそれほど信仰深くなかった。一家がケント州チャタムに移り住んだ時にはバプティスト派の教会に通った。1842年アメリカ旅行をした折りに、ユニテリアン派に共鳴し、帰国後、ユニテリアン派の教会に通いはじめた。飢餓の40年代と言われた時代に、多くの人が貧困に苦しみ喘いでいる中、アカデミックな議論よりも、もっと現実に即した教会の使命、すなわち貧しい人々に目を向けることを実践しているユニテリアン派にディケンズが興味を持ったのはごく自然なことであった。

しかし、彼のユニテリアン通いは2、3年で終わり、亡くなるまで国教会の信徒として教会生活を送った。彼の親友のジョン・フォスターも「本質的な点で、彼が始終最も強い共感を覚えていたのは、国教会の中心教義であった」¹⁾と述べている。ところが、ディケンズが心動かされていたのはユニテリアニズムの寛容さと博愛主義であり、生涯貫いた彼の宗教的信条は寛容、奉仕、超教派であった。

本稿では、このような信仰の遍歴を持ったディケンズが自分の子どものために書いた、『子どものための新約聖書』（『主イエスの生涯』）、息子たちへの「手紙」そして、彼の「遺言書」の中に見られるディケンズの信念（信仰）の核心にあったものは何か。その核心が『クリスマス・キャロル』の作品にどのように反映されているか考察する。

2 ディケンズの宗教的信条と聖書

まず初めに、ディケンズがどのように聖書の教えを解釈していたかを知るために、唯一の直接的な作品である『子どものための新約聖書』を見る必要がある。

彼は40代後半に彼の子どもたちのために、「新約聖書」の簡易版を書いたが、私的なものであったためディケンズは出版を控えていた。当初は『子どものための新約聖書』という題で彼の死の21年前、1849年に完成された。最後の息子ヘンリーが亡くなった1934年、タイトルを『主イエスの生涯』と改め、出版された。しかし、この作品は「新約聖書」として扱われない要因がある。それは、イエスの誕生から昇天までの生涯と初期キリスト教徒の迫害について短く言及されているが、「聖霊降臨」について書かれていない点である。彼が「聖霊降臨」について意識的に避けた理由は「三位一体」を否認するユニテリアニズムの思想と関係しているであろうと推測される。

彼の神学はオーソドックスにはほど遠く、キリストの神性を疑うユニテリアン教徒の立場に近いとはいえ、その神学はその奇跡と復活の希望をキリストに結びつけている。しかし、ディケンズのキリスト教の教義の理解には不確かな点がある。『主イエスの生涯』（『子どものための聖書』）にもはっきりとしたキリストの受肉と贖罪の教義が書かれていないため、その精神と神学はユニテリアン主義的な傾向が強く見受けられる。ディケンズはキリストが「私たちの救い主」と呼ばれる理由を「神様を愛するにはどのようにしたらよいか、死んでから天国に行くにはどうしたらよいか、ということの人々に教えてくださった」からと解説しているように、ディケンズのこの態度はキリストを救い主としてではなく、たんなる教師として見なしていると批評家達の批判もある。しかし、一方では、これはディケンズが「キリストによる罪の贖い」の教義は子どもには困難であると判断し、意識的にこの教義を省いたとも考えられている。

ところで、『主イエスの生涯』全体を通して強調されていることは、キリストの善い行いと神の慈悲である。このイエスの物語では、奇跡も「愛の行い」としての側面から捉えるもので、全体として超自然的要素より、道徳的側面がより前面に出ている。したがって、キリストの愛の行いと教え、つまりその人間性が強調され、

聖なる儀式の源としての神性が欠落していると指摘される。ディケンズにとって「キリスト教の信仰と救いは思案あるいは神秘主義的なものではなく、具体的に表されるべきものである」²⁾ということである。しかし、『主イエスの生涯』の作品には、聖書として重要な「聖霊降臨」が扱われていないにもかかわらず、ディケンズが自分の子どもたちのために「新約聖書」を書いたということ自体、ディケンズが「新約聖書」の教えにいかにか重きを置いていたかということを表している。さらに、こうした彼のキリスト教信仰の表明を「遺言書」の中でも強調し、彼の遺言書を次のように締め括っている。

I commit my soul to the mercy of God through our Lord and Saviour Jesus Christ, and I exhort my dear children humbly to try to guide themselves by the teaching of the New Testament in its broad spirit, and to put no faith in any man's narrow construction of its letter here and there³⁾.

「私の魂をわれらの主であり救い主であるイエス・キリストを通して、神の慈悲にゆだね、子どもたちには、新約聖書の広い精神における教えによって、身を処するよう謙虚に努め、その個々の字句の狭い解釈は誰のものをも信頼せぬよう勧める」と。このように、彼は『新約聖書』のみが人生の道標になりうるものであると考えていることがこの遺言書からも窺える。

死の2年前(1868年)、彼はオーストラリアへ旅立つ末息子エドワード(プローン)に宛てた手紙の中で、人生へのアドバイスを与え、『新約聖書』の教えの重要性を述べている。それはまさにディケンズ自身の宗教的信条の要約でもある。

Never take a mean advantage of anyone in any transaction, and never be hard upon people who are in your power. Try to do to others, as you would have them do to you ...

I put a New Testament among your books... Because it is the best book that ever was or will be known in the world, and because it teaches you the best lessons by which any human creature who tries to be truthful and faithful to duty can possibly be guided.

Only one thing more on this head... Never abandon the wholesome practice of saying your own private prayers, night and morning⁴⁾.

「どんな取引においても、どんな人にも卑劣につけ込んではいけない、自分の思いのままになる人々に対して決して手荒に扱ってはならない、人にして貰いたいと思うことを人にもしなさい… 私はあなたが持っている本の中に「新約聖書」を加えて欲しい。…なぜなら聖書は世界で知られている最高の本であり、聖書はどんな人間も義務に対して正直で忠実であるように心がけるように導くことの出来る最善の教訓を教える本だからです。」

このように、ディケンズは「聖書は世界における最高の本であり、最善の教訓書」であり、それに付け加えて祈りがディケンズにとって慰めであったという彼の宗教的信条を息子のヘンリーにも書き送っている。

『主イエスの生涯』(「子どものための新約聖書」)、「遺言書」、息子たちへの「手紙」という、三つの異なったものの中に表されたディケンズの宗教的信条は「新約聖書のみが人生の道標」であると手紙に書いているように、「聖書」が彼の宗教的信条の根底にあることは明らかである。彼の作品の背景には多くの聖書が引用され、それが彼の作品に深みを与えていると言っても過言ではないであろう。

3 作品『クリスマス・キャロル』における聖書の役割

ディケンズのキリスト教観の根底にある聖書

の教えが、「クリスマス・キャロル」の作品の中でどのような働きをしているかを、作品に用いられている聖書の箇所を取り上げ、特にアールジョンとしての聖書の役割を考えてみたい。

(1) 主人公の名前 (Ebenezer)

スクルージの名前はエベニザー (Ebenezer) と呼ばれ、この作品の中で使われている箇所はごくわずかであるにもかかわらず、ディケンズはなぜこのような名前を用いたのであろうか。

「エベニザー (Ebenezer)」という名前は英語の原語 (original) ではない。実際、「エベニザー」は、ヘブライ名の英語化されたバージョンであり、「エベニザー」という語は旧約聖書サムエル記の中で、イスラエル人がエベニザーと呼ばれる「場所」に野営していた地名として書かれている (サムエル記上 4章1節)。この名前は二つのヘブライ語の合成語で、「stone」という意味のヘブライ語「eben」と、「helper」という意味のヘブライ語「ezer」を結びつけた名前である。このように、an ebenezer はある援助を提供した「石」であった。士師 (行政官) サムエルは神から特別な助けを受けた記念として、モニュメントを建てた。それはイスラエル人たちに神のご保護を思い出させた「helper-stone」(助けの石) であった (サムエル記上 7章12節)。

ディケンズは、スクルージの名前に用いた「エベニザー」という地名が、旧約聖書にあることを周知していた。このことから彼は旧約聖書にも造詣が深かったことが推し量れる。

しかし、ディケンズは「エベニザー」というこの名を頻繁に使用したわけではない。スクルージのファースト・ネームであるこのエベニザー (思い出させる「助けの石」という意味) を最初に使用したのは、亡霊のマーリーである。マーリーが生きていた時の自分のパートナーに、満足していなかったこと、また、マーリーがスクルージを訪れた目的を説明する時に使われている。「今晚こうして、会いに来たのは忠告のためだ。私と同じ運命をたどらずに済む、道も、望みも君にはある。そのことを、私の口から言

いに来たんだ、エベニザー」。

「エベニザー」の名前を使ったのは、他に唯一人、フェジウイグ老でスクルージが尊敬していた昔の雇い主である。全身で笑うフェジウイグ老人の声は、潤いがありおどかで心地よかった。「おお、よく来たな・エベニザー」「今日はもう仕事は終わりだ。クリスマス・イヴだからな、ディック。クリスマスだ、エベニザー！ さあ、表を閉めよう」「床を大きく空けろ！ それ行け、エベニザー」。フェジウイグ老人の指図でクリスマスの準備も整い、楽しいクリスマスの時を皆で過ごし、無礼講のダンスパーティも終わった。メリー・クリスマスの挨拶でフェジウイグ夫婦は皆を送り出した。スクルージの心に光がさし、人を楽しませるといのは「財産を投げ出すにも等しいんだ」(P.70) ということに気づいた。

その名前が最後に使用されたのは、無縁の墓に刻まれた、「エベニザー・スクルージ」という文字として残されたものであった。この墓石の文字はスクルージの心に大きな打撃を与えた。なぜなら、彼が新しい人にならなければ、彼の人生は終わるかも知れないということを暗示していたからである。

ところで、エベニザーという名前は、いったい私たちに何を思い出させるのか。エベニザー・スクルージは“squeezing, wrenching, grasping” - 搾り取り、もぎ取り、けちな - 性格をした人としてだけでなく、『クリスマス・キャロル』の読者たちにとって、エベニザー・スクルージは記念像として役立っていた。生前自分が作り上げてきた重い鎖を引きずりながら、悲痛のうちに地上を歩いていたジェイコブ・マーリーや他の亡霊たちのように終わることがないように、ディケンズは、忘れてはならない事を私たちに思い出させるため、helper-stone (助けの石) としてスクルージを描き、クリスマスの重要性を奨励するために、スクルージにエベニザー (助けの石) という名前を付けたと考えられる。旧約聖書に地名として出てくる「エベニザー」の名は、このような意味でこの作品においてアールジョンの役割を果たしていると同

時に、その名前によって、この作品を意味深いものになっている。

ディケンズにとって、クリスマスの最も重要な価値は、神の御子の誕生を祝うことより、むしろ、クリスマスは友達や家族と楽しむための時であり、さらにクリスマスは寛大にふるまうのに相応しい時でもあった。ディケンズ自身のクリスマスに対する評価はスクルージの甥の言葉に表れている。

「僕はね、毎年、クリスマスがめぐってくるといつも、ああ、いい季節だと思うのです・・・とにかく、クリスマスは喜びの時です。人がみな、優しく、大らかで、慈しみの心をいだくようになる嬉しい季節です。—*a kind, forgiving, charitable, pleasant time*— 男も女も申し合わせたように狭い心をくつろげて、自分より身分の低い相手も墓場にいたる人生の旅の道連れで、行き先の違う無縁の集団ではないのだという気になります。

<to think of people below them as if they really were fellow — passengers to the grave, and not another race of creatures bound on other journeys.>

そんなことが起きるのは、1年を通してこの時期だけですよ。」

『クリスマス・キャロル』の物語が終わるにつれて、このテーマはその季節にさらに強調されている。このようにディケンズにとって、エベニザー・スクルージは私たちに思い出させる「助けの石」であり、また、クリスマスを祝うだけでなく、貧しい人々、特に貧しい子供達に対して寛大であるようにと思い出させるためのアリュージョンでもある。

(2) オランダ・タイルの「聖書絵解き」

「古びた暖炉はその昔、オランダの商人が作ったもので、炉前の床に聖書の情景を図柄にした古典趣味のオランダ・タイルが敷きつめてある。カインとアベル。ファラオの娘たち。シバの女王。羽布団のような雲に乗って受胎告知に降り

てくる天使。アブラハム。ベルシャザル。小舟で湖に乗り出す使徒たち。」

スクルージの居間の炉の周囲に敷いてある「聖書の絵解き」のオランダ・タイルに目を留めることなく、ただ読み流してもいいものか、それとも物語と何か関係があるのだろうか。もし、関係があるとすれば、作者の意図は何であったのであろう。オランダ・タイルに描かれた聖書の個所をこの物語へのアリュージョンとして考えてみたい。

スクルージと甥のフレッドの姿は<カインとアベル> (創世記 4:3~16) を彷彿させる。この聖書の個所には二つの教えがある。一つは、アベルの代表する遊牧民族と定住民のカインの民は、相対立する二つの社会集団を意味している。定住民 (カインの民) は遊牧民であるアベルより社会的に上位の民であった。農耕民族は遊牧民の社会的地位を凌駕していた。神は若い者、弱い者に味方され、神はアベルとその捧げものを見て、その弱き者を選ばれたこと。もう一つは、神の掟の要約である二重の命令が示されている。すなわち、神の愛と隣人への愛 (マテオ 22:40) である⁵⁾。

このような意味を持った「カインとアベル」の物語は『クリスマス・キャロル』の主人公スクルージと甥のフレッドに表されている。スクルージは資産家であり、フレッドは無産階級であった。フレッドはクリスマスに対して、心からの尊敬と信仰を示し、貧しくとも寛大さに溢れた人物である。スクルージは甥のフレッドの「クリスマス、おめでとう！」と言う言葉に対していつも「ばかばかしい」と言って、罵る。農耕民であるカインが遊牧民のアベルを支配していたように、資産家であるスクルージは無産家のフレッドを支配していた。

しかし、後にスクルージも回心し、クリスマスに対する崇敬の心を取り戻し、貧しい人々に施し、神の愛と隣人への愛に生きることに目覚めた。このように、「カインとアベル」の中にスクルージとフレッドのアリュージョンを読みと

ることが可能であろう。

＜ファラオの女王＞（出エジプト 2：1～10）は葦の茂みから赤ん坊のモーゼを救い出し、養育したように、スクルージも事務員ボブの病弱の末息子ティムの第二の父親となって、ティムを養育することを約束した。このように、ファラオの女王とモーゼの話の中にスクルージがティムの第二に父親になったことの原型を見出すことが出来る。

＜シェバの女王＞（I列王記 10：10）はソロモンの知恵と富とに敬服し、彼女は「金120キカル、非常に多くの香料、宝石を王に贈ったが、このシェバの女王がソロモンに贈ったほど多くの香料は二度と入って来なかった」と言われるほどの贈り物をした。「シェバの女王」のタイルの絵は、改心後スクルージが貧しい人びとに送った贈り物に対するアレルギーンとして考えられる。

全てを捨てて神の声に従った＜アブラハムの旅立ち＞（創世記 12：4）のように、スクルージも精霊の声に従って、スクルージの「魂の旅」が始まった。恵みはまず神のイニシアティブによって与えられるが、アブラハムが神のイニシアティブに応えたように、神の恵みに応えるためには、人間の側の協力が必要であることをほのめかしている。すなわち、スクルージも精霊に対して彼の協力が必要であることが示され、スクルージの協力によって改心へと促された。アブラハムの旅立ちは、スクルージの改心への旅立ちを暗示していると考えられる。

「人の手の指が現れて、ともし火に照らされている王宮の白い壁に文字を書きはじめた。王は書き進む手先を見た。王は恐怖にかられて、顔色が変わり、腰が抜け、膝が震えた。」（ダニエル 5：5）これはペルシャザル王が千人の貴族を招いて、金銀、銅、鉄、木、石で作った神々を褒めたたえ、大宴会を開いていた時のことであった。このとき王は理解しがたい文字を書く人の手の指に恐怖感を覚えた。＜ペルシャザル王に現れた「人の手の指」＞はまさに、スクルージに現れた「未来のクリスマスの精霊」の指のアレルギーンと言えるであろう。

その他、＜受胎告知＞（ルカ 1：26-38）はもちろん、クリスマスを意味するものであり、＜小舟に乗って海に逃れんとする使徒達＞（マタイ 8）のタイルの絵は「主よ、助けて下さい」という使徒達の叫びの中に、スクルージの心の叫びがほのめかされているようでもある。以上のように、オランダ・タイルの「聖書絵解き」はこの作品の要所を要約しているアリュージョンと考えられる。

(3) 子どもによる救い

ここで、ティムの言葉とピーターが朗読する聖書の箇所を取り上げ、スクルージの救いへの道との関係について触れたいと思う。

1) ティムの言葉

足の悪い末の息子タイニー・ティムが教会から帰ってきた時、夫クラチトにティムの教会での様子を妻が尋ねる場面がある。

「それはもう、文句のつけようがない」とボブは言った。

「いや、それ以上だよ。ずっと一人きりでいる間に知恵がついて、不思議なことを考えるようになったのだなあ。帰る途中でティムが言うには、教会でみんなから見られたかったとき。足が不自由だから、クリスマスにみんながそれを見て、キリストが足萎えを歩かせたり、盲目を見えるようにしたりしたことを思い出せばいいと言うんだよ」(p.96)

He told me, coming home, that he hoped the people saw him in the church, because he was a cripple, and it might be pleasant to them to remember upon Christmas Day, who made lame beggars walk and blind men see. (p.43)

ティムのこの言葉は「目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、らい病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされて

いる」というルカ福音書7章22節の言葉を彷彿させる。

The blind receive their sight, the lame walk, lepers are cleaned, and the deaf hear, the dead are raised up, the poor good news preached to them. (LK.7: 22)

なぜ、作者は子どものティムにこの聖書の言葉を言わせたのであろうか。ルカ福音書7章22節はイザヤ書(61:1, 35:5~6)からの引用で、「救い」について述べている箇所である。ティムの言葉を通して、イエスは「メシアであり、貧しい人々に福音を告げられる方」であることを示している。病人は癒され、死者はよみがえり、貧者は福音を聞く。こうした豊富な奇跡は、メシア時代の一つの特徴であり、しるしであった。イエスのご自分がメシアであることを、メシア時代を預言するイザヤの言葉に当てはめ、メシアの到来はもはや始まっていることを示した。しかし、それは神の正義の輝かしい出現によってではなく、きわめて地味な慈悲の行為、すなわち病人を癒して人間の心を、福音を受けるのにふさわしく準備するということから始まったのである。

ディケンズがタイニー・ティムにこの言葉を言わせたのは、スクルージの冷たい心を温かくさせ彼を救いへと導くものであった。苦しんでいる子どもたちとの関わりは、ディケンズ自身の経験を反映させたものである。スクルージの最初のやさしさは自分自身の子ども時代を観察することから来ている。これが、彼が他の子どもを同情する準備となり、また子どもの苦しみに触れることがディケンズの子どもに対する同情のもとになった。ディケンズの子どもたちの苦しみについての確信は、風変わりな予期しない結末が説明している。「現在のクリスマスの精霊」はスクルージを救うために、精霊の使命の終わり近くになって、彼の上着の下に隠されていたこの二人の子どもを見せる。この二人の子どもは、とても不幸で、みすばらしく、非常に醜く、忌まわしく、哀れである。その痩せ衰

えたその子どもたちはいったい誰か。一人は男の子で「無知」、もう一人は女の子で「欠乏」である。“This boy is Ignorance. This girl is Want.”

子どもたちに対するスクルージの答えに焦点を当て要約すると、それはクラチット家のタイニー・ティムと「現在のクリスマスの精霊」の上着の下に隠れていた二人の惨めな子どもたちであった。しかしスクルージの変容の助けとなったものは、ティムと二人の子どもの苦しみのヴィジョンよりも、むしろクリスマスの喜びの精神で楽しむ貧しい人々が祝う、クリスマスのその光景の方が、はるかに力があったと言える。

「現在のクリスマスの精霊」はスクルージに貧しい人々に対する彼自身の発した軽蔑の言葉で、2度スクルージを脅迫する。スクルージは大きな悲しみをもって、悔いる。スクルージが貧しい人々や苦しんでいる極貧者達のために備えを作るために要求された時の彼の答えは「監獄はないのかね」であった。スクルージのこの心のない冷たい言葉には、「主は豊かであったのに、あなた方のために貧しくなられた」と言う、パウロの言葉を全く思い出していない(コリントII 8:9)。しかし、スクルージは三人の精霊の訪問を受けた後、彼は貧しい人々を助けるための二度目にチャンスを得た時の彼の答えは、「あなたは神、主が与えられる地で、どこかの町に貧しい同胞が一人でもいるならば、その貧しい同胞に対して心をかたくなにせず、手を閉ざすことなく、手を大きく開いて、必要とするものを十分に貸し与えなさい。」⁶⁾という、主の言葉(申命記 15:7-8)に心を配っている。

では、スクルージをこれほどまでに変えたものの何か。それはスクルージがひどく扱った人々が彼に好意・善意・親切(grace)を施しているのを目撃したことによる。クリスマスに彼の甥フレッドと彼の事務員ポップが、スクルージのために乾杯し、フレッドはパーティの最後の場面でスクルージのために幸運を祈り、スクルージに対する優しい言葉で祈りを終える。

“A Merry Christmas and a Happy New Year to the old man, whatever he is!” said Scrooge’s nephew. “He wouldn’t take it from me, but may he have it, nevertheless. Uncle Scrooge!” (p.54)⁷⁾

——「どこでどうしているか知らないけれど、とにかく、メリー・クリスマス！新年おめでとう！」甥は言葉を足した。「僕からじゃあ嬉しくはないでしょうけれど、とにかくこの杯を受けてくださいよね、伯父さん！」

甥のこの言葉を聞き、スクルージは顔にこそ出さなかったが、なぜか無性に心が弾んだ。精霊が時間を与えてくれるものなら、何も知らずにいる一同に、届かぬ声で、礼を言いたい気持ちになった。好意・善意・親切がスクルージの心に押し寄せている。「現在のクリスマスの精霊」がスクルージを彼自身の冷酷さと正しく対決させ、単なる親切の投入ではなく、心の完全な変化が必要であることをスクルージに自覚させる。このように人間が救われるためには悔い改めが必要であるということを強調している。

2) ピーターの聖書朗読

無垢という心の変遷について、ディケンズの頭にはマルコ福音書第9章36-37節があったと言っていいであろう。なぜなら、スクルージがティムの死に関する場面で聞く「幼子をとりにて、彼等の中に置く」は、マルコ福音書第9章36節と同じだからである。ディケンズが新約聖書のこの個所をこの作品に取り入れたという主要なアイデアは、ディケンズがタイニー・ティムについて語る「若いティムの魂よ、おまえの子供としての本質は神からきたものである」からも窺える。

イエスは一人の幼子をとりにあげて、弟子達の中に立たせ、「誰でもこのような幼子の一人をわたしの名のゆえに受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。そして、わたしを受け入れる者は、わたしを受け入れるのではなく、わたしをおつかわしになったかたを受け入れるのである」(マルコ 9:37) と言う。スクルージは

この言葉まで聞き取ったかのように、生まれ変わり、実際は死んではいなかったティムの第二の父親となる決意をした。マルコ福音書における子どもの意味は、「彼を迎えることは、キリスト自身を迎えることである」ということである。子ども達をキリストの愛のために愛と献身をもって迎え、子どもを世話するという仕事は人間の目にはそれほど輝かしいものではなく、しばしば、感謝を受けることの少ない仕事である。

当時のユダヤの社会では、子どもは、謙遜な人々、小さい者、身分の低い人々であり、子どものことは大して心に掛けられず、大事にされなかった人々であって、かえって保護と援助を必要とする人々を指している。厳密な意味での子どもであるにせよ、あるいは社会の最も低い所にいる人々であるにせよ、イエスは、自分の愛のために、子どもあるいは名もない人々をどのように迎えるべきであるかを教えた。彼等を自己没却、献身、無償の愛をもって迎えることは、彼等を通して、イエス自身を迎えるという尊いことであり、それはまた、イエスを送った御父を迎えるということなのである。

「未来のクリスマスの精霊」に導かれて、ティム坊やのいない静まりかえったクラチット家を訪れたスクルージが聞いたものは、ピーターが読む聖書の言葉であった。「そして、ひとりの幼子をとりにあげて、彼等の真ん中に立たせ…」(マルコ福音書 9章36節～37節)

“And He took a child, and put him in the midst of them.”

この朗読は、ティムを亡くした母親の涙で中断されてしまうが、読者はその聖書の言葉を読み、幼子を抱いて言われたキリストの言葉である、「だれでもこのような幼子のひとりを受け入れる者は、私を受け入れるのである。」を静かに思い起こし、ティム坊やと幼子キリストを重ね合わせるであろう。以上これらの二つの聖書の引用は子どもによる救いのアルージュンとしての役割を果たしていると考えられる。

4 ディケンズのキリスト教観と「死」

スクルージを最終的に変えた要因は悔い改めであり、死とその意味に触れたことである。

エベネザー・スクルージを訪れる最後の精霊(Spirit)は「未来のクリスマスの精霊」で、黒で覆われた静かなもの言わぬ霊である。この精霊は「死」という架空の形を取っている。ディケンズは「未来のクリスマスの精霊」をなぜ「死」に関係づけたのであろうか。

ディケンズは愛する死んだ人々を思い出す時として、クリスマスを経験していたように思われる。それ故に、クリスマスそのものが「死」についての追悼へと導くことができた。スクルージの性格を変えるために「死」が示されたことは、彼の悲しい死が、彼の人生の価値のなさを強調しているという事実である。霊の啓示は、彼の人生の空しさをスクルージに明らかにした。

イエスの誕生はイエスの十字架上で死の前兆である。三王礼拝の贈り物(マタイ福音書 1章11節)の一つである「没薬」はキリストの死のシンボリックな前ぶれであることを示している。自分自身の死と向き合うということは、確かに個人の変化へと導くことが出来る。私たちが新しい生命を得るために神の聖霊(the Holy Spirit of God)が必要である。クリスマスの中にある「死」のテーマはキリスト教神学の中心でもある。クリスマスに私たちはイエスの誕生を祝うけれども、イエスの誕生は十字架上のイエスの死への前兆でもある。没薬(myrrh)が死体に防腐処置(ヨハネ福音書 19章39節)を施すために使用されて以来、キリストの死のシンボリックな前ぶれとして没薬の贈り物を解釈することは一般的であり、キリスト教の観点から、『クリスマス・キャロル』における「死」の存在は道理に適っている。

ところで、クラチット家では、死んだティムのことを思い出し、なつがしがっている。精霊は、最後に墓場を見せることによりスクルージ自身の幸福のためには、他者への思いやりを持つことが大切だと悟らせる。スクルージが違う進路をとれば、終わりも異なってくるのではな

いかと考えることは、常に未来のことを気にかけて今を生きている人間を印象づける。未来をつきつめて考える場合、行き着く先は、結果的に死ということになるが、自分の死とそれにとまなう光景を見せられ、スクルージのイマジネーションは大きく働く。自分の死における喪失感を、金という社会的価値で埋め合わせることを肯定して生きてきたが、彼の場合、肯定的思考の監獄に閉じこめられて生きてきたといえよう。つまり、自分の金儲け主義の生き方を肯定する思考の監獄に閉じこめられてきたのである。「未来のクリスマスの精霊」によってさまざまな光景を見せられ、スクルージは、自分が惜しまれて亡くなりたいたい、死後他者に気に掛けてもらいたいという願望があることに気づく。

スクルージの回心は、非常に劇的である。注目したいことは、彼が精霊といっしょにいたことより、月の何日かわからなくなって、「なんにもわからないわい。赤ん坊のようなものだ。気にすることはない。かまうものか。いっそ、赤ん坊になりたいくらいだ。」と全く無垢な状態になっていることだ。つまり、ここに経験から無垢な状態への完全な回心が見られる。スクルージはボブ・クラチットに大きな七面鳥を贈ることに決め、スクルージはボブに、「実のところわしはこんなことにはこれ以上、我慢がならんのだ」という。この言葉は、彼のかつての生き方に対する彼の危機感の表明であり、無垢なる状態への回心の宣言でもある。

「クリスマス・キャロル」にはこのような劇的な回心がみられるが、キリスト教の教えが明確に取り入れられている点が作品の特徴として重要である。家族団欒と喜ばしい宴という伝統的なクリスマスの祝いを再びイギリス文化に取り戻したのはディケンズであった。クラチット家のクリスマス・ディナーはその典型である。しかし、ディケンズの描くクリスマスはもう一つの重要な意味がある。それはクリスマスと「贖罪の死」との関係である。

この作品の中で、スクルージはクリスマス・イヴの夜、幻像の中で「死」を見る。それは、過去における自分の幼かった頃の想像力や愛情

の死であり、現在における兄弟姉妹との断絶という死であり、未来における足の悪いティム坊やの死と自分自身のおぞましい死である。スクルージが幻の中で見たティム坊やの死が、彼の救済の要因となり、スクルージはクリスマスの朝に回心して、全く新しい人間に生まれ変わる。

スクルージは生まれ変わった時、「私は過去と現在と未来に生きよう」という誓いの言葉を繰り返す。これは、スクルージに与えられた新しい生命が永遠という時間を超越したものであり、過去と現在と未来における「死」を克服したことを表している。ティム坊やの子どもの死はある意味で一種の生け贄となっている。無垢な者、小さな者、弱い者の象徴である子どもの死は、ある種の贖罪として用いられ、クリスマスは、「偉大な主ご自身が子どもであられた」日であるとディケンズは『クリスマス・キャロル』の中で強調している。

終 わ り に

「幼子をとって、彼らの中に置く」「幼子の一人をわたしの名のゆえに受け入れる者は、わたしを受け入れる」(マルコ 9:36-37)。ピーター少年のこの聖書朗読の中に、ティム坊やとキリストを重ね合せている。子どもたちによって示された聖書の言葉は、スクルージに改心の恵みを与え、救いをもたらす決定的なものとなった。ディケンズは『主イエスの生涯』の中で次のような言葉で締めくくっている。

Remember! — It is christianity TO DO GOOD always — even to those who do evil to us. It is christianity to love our neighbor as ourself, and to do to all men as we would have them Do to us. It is Christianity to be gentle, merciful, and forgiving ...⁸⁾

「どんな人にもいつも善を行い、隣人を愛しなさい。そして、やさしく、慈悲深く、寛大で

ありなさい。」というディケンズの『主イエスの生涯』のまとめの言葉は、そのまま立ち直ったスクルージの行いに表れ、人柄となって表された。ディケンズにとって、「クリスマスはやがて我々を生かすために十字架上で贖罪の死を遂げる贖い主が生まれる日」であり、「クリスマス」という出来事を指し示す先には、贖罪の死と「永遠の命」という「復活」があることを関連づけている。

引 用 文 献

- 1) John Forster, The Life of Charles Dickens, J. M. Dent & Sons Ltd, Vol.1. p.282. 1966.
- 2) 島田桂子, ディケンズ文学の闇と光, 彩流社, p.22. 2010.
- 3) Robert Newsom, Charles Dickens Revisited, Twayne's English Authors Series (TEAS 558), Twayne Publishers, p.70 .2000.
- 4) Edited by Georgina and Mary Dickens, Letters of Charles Dickens 1833-1870, Cambridge University Press, p.706. 2011.
- 5) Jerusalem Bible, DARTON LONGMAN & TODO, p.19. 1966.
- 6) Robert C. Hanna (ed.), The Dickens Christian Reader — A Collection of New Testament Teachings and Biblical references from the Works of Charles Dickens, ANS Press, New York, p.89-93. 2000.
- 7) Charles Dickens, The Complete Works of Charles Dickens — A Christmas Carol and Other Christmas Books, Cosimo classics, p.54. 2009.
- 8) Charles Dickens, The Life of Our Lord, The Westminster Press, p.124. 1934.
(2016年3月28日受稿)